

長都の思い出

神 出 杉 雄

猫

私は生まれるとき、猫に借りをつくった。祖母の話では、私が生まれる前、家にいた三毛という猫に、「三毛や、赤児あかこが生まれたらお前はうちにや置けんけえの」と、毎日のように言い聞かせていたそうだ。

その頃、農村では、生まれたての赤ん坊を藁で編んだ「いずこ」に寝せて家に残し、皆で畑仕事に出してしまう農家が多かった。その留守に猫が「いずこ」に入り込み、赤ん坊に添い寝をして、窒息死させることが時たまあった。祖母はそれを心配していたのだ。

ところが、私が生まれたとき、家人が気づかない間に、三毛はいなくなっていた。

ひと月ぐらい経ったある寒い日、祖母が家の近くの林道を歩いていると、道ばたに積み上げられたたなまき柵薪（農家の燃料）の上に、三毛がしょんぼりと坐っていた。

「ありや、三毛や、わりやこげんところにおったんか。この寒いに」と声をかけると、三毛は、なつかしように「ニヤーン」と一声鳴いて、それきり姿を消してしまった。「聞き分けのええ猫じゃった」と祖母は言う。

それを聞いた私は、子供心に抱いた三毛に対する負い目みたいなものが、大きくなっても、心のどこかに残っていたようだ。

風景

私が小学校に入ったのは、昭和元年だから、今から八四年前である。

当時の長都には、今のような広々とした田園の風景はなく、ほとんどが雑木林で、ところどころに畑があり、水田があった。

家屋はおおむね木造の草葺き屋根。なかには壁もすべて草囲い、という家もあった。材料には葭よもぎが使われていた。そのため火災が多く、火災が発生すれば必ず全焼で、どこの家もたいてい一度は全焼に見舞われている。

大正末期から昭和の初めは、まだストーブもなく、居間の炉に薪をくべて炊事や、冬の暖をとったりするので、煙くて大変だった。当時の家は、居間には天井がない。草葺きの屋根裏が露出して、葭や、骨組みの丸太や、荒縄などが、長年の煙で真っ黒に煤すすが、煤がづらら状にぶら下がっているところもあった。その下で、家族が食事をしていると、真っ黒な屋根裏を、青大将が這い回っていることもあった。彼らは、逆さになって屋根裏を這い回っても、決して食事をしているところへ落ちてくるようなことはなかった。

農業と生活

今は色々な耕作機械が使われているが、当時、田畑はすべて馬耕だった。飲料水は井戸水、洗濯は小川や灌漑用水などで、照明は石油ランプ。秋の収穫で多忙になると、徹夜作業に安全灯というのが使われていた。いずれ



写真-1 昭和初期の草（葭）葺きの住宅（執筆所蔵）



写真-2 田植え（執筆者所蔵）

も燃料は石油で、電灯がともり、水道が普及したのは戦後のことである。

農家は、春から秋までは外で働くが、冬も縄^な縄^ない、米俵^な編みなどで、結構忙しかった。冬の夜、母が家の中に稲藁^なを持ち込んで、掌^{てのひら}や指を赤く擦り剥きながら縄^な縄^ない、俵^な編みなどをしていた光景を私は思い出す。

昭和十年代に入ると、縄^な縄^ない機という機械が出て来て、冬の重労働から解放され、年間必要な数百

キの縄^なが、短時日で出来るようになった。しかし、当時の農家はそれを買^なう金がなかったため、何軒か共同で購^な入し、日程を決めて、使い回しをしていた。

当時、稲作農家の経営は、水持ちの悪い火山礫^な地で収獲^なが少なく、生活が苦しかった。畑作農家のほうはその筋からの指導もあり、酪農^なが次第に普及しつつあったが、その「多角^な経営」がもたらしたものは、極度



写真-3 鳥に餌をやる老女（執筆者所蔵）

の多忙さだった。農家の人々は、時間と体力の限りを尽くして働き続けなければならなかった。

学校と生徒

私が小学校の一年生に入った当時は、農村では自転車も珍しい時代だった。学校から三^き範囲の子供たちは、夏も冬も、雨の日も吹雪の日も、毎日歩いて通っていた。もちろん、親が送り迎えするわけでもない。

通学する履物は、夏は草履、冬は藁^なで編んだ長靴だった。草履の鼻緒など、すぐ切れてしまうので、いろいろ苦労したものだ。

子供たちの服装は、家でも学校でも、夏は木綿^なの紺^なの袴^な、冬は綿入れなどを着ていた。鼻水を垂らしている子が多く、それを袖で拭くので、着物の袖口は、乾いた鼻汁でびかびか光っていた。パンツだのズボンだの服だのが現われてきたのは、昭和四年頃で、それまでは、校庭で遊んでいるときなど、男の子も女の子も、しゃがむと下の方が丸見えになるので、お互いに冷やかしたりしていたものだ。

子供たちの遊びは、学校では、男の子は砂の上に円を描きながら相手を攻めていく「国盗^なり」、パッチ、女の子は、綾^なと^なり、おはじきなどだったが、学校以外では、雑木林へ行って、服やズボンにあちこち鉤^な裂^なきを作りながら、木登りしたり、山いちごや山葡萄採りをしたり、木の枝



写真-4 生徒たちも田植え作業（執筆者所蔵）



写真-5 馬鈴薯掘り。小学生も放課後は労働力（執筆者所蔵）

にテングスで魚針とミミズをぶら下げて、小川で魚釣りをしたりしていた。時には、小川につないである誰かの丸木舟を無断で借用して長都沼へ行くなど、「悪さ」も結構やっていた。

その頃、長都小学校というのは、現在の長都神社の隣で、藤本敬一氏の土地に建てられていた、木造板張りの校舎で、生徒は八十数人、一年生から六年生までを、二つの教室に押し込んで、先生は二人、一人の先生が三学級ずつを教えていた。一時間ごとに一五分の休憩があつて、残り四五分のなかで、一学級が習う時間は一五分しかない。あとは自習だが、この自習の間、真面目に勉強している子もいれば、ノートや教科書の余白に落書きをしたり、木製の机のふたにナイフで穴を開けたり、いろいろなことをするのがいた。

この、長都小学校は本校で、それから約四^五分^六離れたところに、釜加の分校というのがあり、そこでは一年生から六年生までをたった一人の先生が担当していた。しかし、当時、年間の行事であつた四大節や、運動会、学芸会などは、本校、分校、全員が集まり、父兄も集まって盛大に行われたので、生徒たちにとってそれは楽しい日でもあつた。

ところが、昭和六年の夏、長都の学校問題というのが始

まった。長都地区の半分と釜加全域の父兄が、子供に登校拒否をさせ、家庭学習を始めたのだ。これは当時では珍しい事件で、全国紙に大々的に報道された。問題の発生は、長都小学校と釜加分校との、住民の意向を無視した移転統合にあつた。そのトラブルは解決されないまま、長い年月の中で風化してしまつたが、その複雑な顛末は、記せば長くなるので割愛しよう。